

The Human 識者に聞く

名古屋市立大学統合解剖学分野では
医学生の解剖実習、医師のためのキャダバー・サージカル・トレーニングを行っています。
そのために提供いただくご遺体は、年間およそ50体。そのすべての受け入れ、ご遺体の処置・保存、
そして、ご遺族や、これから献体をお考えの方への対応を担っているのが、4名の特定技術職員です。
今回お話を伺った本多信彦氏もメンバーのお一人。解剖・組織技術研究会の副代表幹事も務めるなど、
ご遺体者の思い、時代のニーズを見つめ、解剖学教育、医師の技術向上への貢献に全力を注ぎ続けています。

40年に亘り、献体された方のご意志を受け止め、 ご遺体を常に最善の状態にし勉強する環境を整える。

公立大学法人名古屋市立大学
医学研究科統合解剖学分野
特定技術職員

本多 信彦



1981年名古屋工業大学第二部工業化学科卒。1982年名古屋市立大学医学部解剖学第一講座(衛生技術)電顕技術・写真処理を経て、2012年名古屋市立大学に移籍、2018年以降、同大学医学研究科統合解剖学分野特定技術職員を務める。表彰:2014年医学教育等関係業務功労者 学会:日本解剖学会、解剖・組織技術研究会(副代表幹事)。

4名の技術職員が共同して、 ご遺体の受け取り、ご遺体の処置を担う。

— 本多さんは、名古屋市立大学(以下、名市大)の解剖実習、キャダバー・サージカル・トレーニング(以下、CST)に、長く関与されていらっしゃるのですか?

本多 1982年に名市大に就職し、当初は、医学部解剖学第一講座で、電子顕微鏡を使った研究補助を中心とした仕事に携わっていました。10年後の1992年に、献体業務担当の先輩が退職され、それ以降、ご遺体の処置・保存をはじめ、篤志献体団体である不老会さんとの連携、ご遺族との面談といった献体業務全般を担当することとなり、現在に至っています。

— 数えてもう40年、解剖実習・献体業務などに関わっていらっしゃるベテランですね。

本多 現在、ご遺体に携わる技術職員は4名います。私を含め二人が統合解剖学、二人が機能組織学。一番の若手職員も30年を超えるキャリアを誇り、全員がベテラン

といえますね。4名ともご遺体の処置・保存を担うことができ、CSTだけでなく、解剖実習への対応も、4名で共同して行っています。同じメンバーで30年に亘りこの仕事をしていきますから、あうんの呼吸というのでしょうか、自分で言うのもなんですが、良いチームワークを保っていますね。

ご遺族へのご説明は、献体全体の手順や イメージを一番知っている私たちの責務。

— 先程のお話にあった献体業務全般について、具体的な内容を教えていただけますか?

本多 献体そのものについていうと、お亡くなりになった連絡を受けたら、まずはご遺族にお会いしお悔やみを申し上げ、ご遺体をお引き取りすることから始まります。大学にご遺体が到着後は、保存期間を考慮して、ご遺体の防腐処置を行います。その後、解剖実習・CSTに活用させていただき、最終的には、ご遺体の火葬の手配を行い、ご家族にご遺骨をお返す。大きいいうとこのような業務を行っています。



イノベーションセンターの実習使用機器



イノベーションセンターの換気を定期的にチェックします

— ご遺体に関すること以外ではいかがでしょうか？

本多 献体をなさった方のご遺族、また、これから献体をお考えの方への対応があります。ご献体いただくまでの流れ、どのように活用させていただくかといった内容を含め、ご説明いたします。献体の全体の手順やイメージをお伝えすることは必要ですし、それを一番よく知っているのは、私たち技術職員ですから、誠意を持ってお話しさせていただきます。

— 確かに、一番解っている技術者からお聞きできるのは、ご遺族や献体をお考えの方には、「確かな情報」として受け止めやすいですね。ご遺族への説明で、特に力を入れる点がありますか？

本多 ご遺骨をお返すまでに1年から2年かかるということ。火葬の際に、基本的にご遺族は立ち会いはいただけないということ。この2点ですね。献体を登録されるご本人は、ご自分の確固たる意志を持ってお決めになられますが、ご家族は、その意志に促されて同意サインをしましたが、本当に献体して良いのか、あるいは、献体してしまっただが良かったのかと、思い悩まれる方もいらっしゃいます。そうした方々に、故人の意志どおりに献体して良かったと思っただけのよう、きちんとご説明、ご報告するのが、私たちの責務だと考えます。そして業務にはもう一つ、献体団体である不老会さんへの対応があります。会員さんのさまざまなご質問にお答えしたり、実際に献体するにはどうするかをご説明したりいたします。また、不老会さんの日常的な行事への対応、不老会本部との擦り合わせといった業務を担っています。

「ご遺体の処置・保存には、
慎重のうえにも慎重を重ねる。」

— ご遺体を受け入れお預かりしてから処置・保存、解剖実習・CSTでの活用、ご家族へお返すするという流れの中で、難しいことはございますか？

本多 ご遺体の処置・保存に関して言いますと、血管から

防腐処置のための薬液を注入させていただくのですが、ご献体はお一人ずつ体格が違えば、血管の状態も違い、いわばお体は人それぞれです。ご遺体の状態に合わせて、本当に細心の注意を払って行るのが基本中の基本ですね。一度薬剤を注入したら終わりではなく、何回も確認します。昼、処置をしたら、夕方、きちんと薬液が入っているかチェックして、また翌朝チェックするという形になります。そのうえで保存ですが、よく冷蔵設備で保存するのでは？と聞かれるのですが、そうではありません。室温で保存させていただいています。だからこそ室温で耐え得る処置が必要であり、大切。万が一、注入が不十分だったということがあれば、その方の医療のために役立ちたいというご意志を無駄にしてしまう。それだけに、薬液注入は、何年やっても慎重のうえに慎重を期して行っています。

— 保存期間はどれくらいなのでしょう？先のお話で、ご遺族にご遺骨が帰るのが1～2年後とおっしゃいましたが…。

本多 例えば、医学生の実習は、名市大では一年に1回4月～6月末と決められています。ですからその年の



解剖実習で活用させていただくことになれば、1年の保存になります。実習時期が過ぎてしまうと、1年後、つまり2年間の保存です。一方、CSTで活用させていただく場合は、現在、さまざま

な診療領域から年間何十件もトレーニング実施の相談があるものですから、都度活用させていただいております。ただ、本学では火葬を行うのが、3月・7月と決まっているため、やはり時期によっては、ご遺骨をお戻すのに、1年から2年はどうしてもかかることになります。そしてその間、私たち技術職員が大切に保存をさせていただいています。

「ご献体一体で、複数の診療科が、
勉強をさせていただく。」

— 現在の業務において、ご苦労されていることはありますか？

本多 今、大学にご献体いただくのが年間50体前後ですが、半分の25体は学生の解剖実習、半分の25体をCSTで活用させていただいています。ただ、現状、CSTの実施領域が、脳神経外科、耳鼻咽喉科、歯科口腔外科、整形外科、形成外科、そして、麻酔科と、どんどん広がってきています。つまりトレーニングの希望が増えてきており、一体のご遺体を、部位ごとに複数の診療科のトレーニングに活用させていただいています。そこで肝心なのは、1度のトレーニングで使わせていただいたご遺体を、次のトレー

ニングまでの間、再び保存することです。故人の意志に応え、医学生への育成、医師の技術向上のために活用させていただくには、献体として良い状態を保つことが重要で、そこは非常に神経を使うところです。そもそもご遺体の処置法・保存法は、それほど多くの手法がありません。新たなアイデアはあっても、すぐに検証してみるというわけにはいきません。私たち技術職員は、前と同じことを行い、前と同じ結果を導くのが、最善の処置なのです。ただしこれは技術の進歩という面からすれば、日本だけでなく世界的に共通する課題と言えます。

— そうした問題は、本多さんが副代表幹事を務められている解剖・組織技術研究会でも検討されているのですか？

本多 そのとおりです。この研究会は、技術者だけの全国組織です。現在、100くらい大学の解剖実習を行っています。以前は大学間で情報が共有されておらず、ご遺体の処置



にしても、各大学がそれぞれの流儀で行っていました。みんなより良い方法を模索しているのですが、それがまとまっていなかった。そこで全国的な研究組織を有志で立ち上げたわけです。

— 情報共有しながら、ともに高め合っていくという考えですね。

本多 はい。毎年、春と秋に集まり、各大学の研究発表会、研修会などを行っています。春は、解剖学会のサテライトセッションという形で、さまざまなテーマでの発表と研修を行い、秋は、研究会独自の研修会を実施します。ご遺体処置法、施設改善、あるいは、献体と法律の関係など、献体から処置、解剖に関連するあらゆることについて、各大学の技術者同士が、包み隠さず情報交換ができる場となっています。私自身も、2021年の9月に、本学技術職員として、処置法についての研究内容や成果などを発表しました。自画自賛で恐縮ですが、「これはいいだろう」という結果が出たものだから、全国的に少しでも普及したいと思います。

ご遺族の気持ちに寄り添うことが大切。 学生・医師にはしっかり勉強してほしい。

— お話が前に戻りますが、ご遺族にお話をされると、心がけている点をお聞かせください。

本多 一番大切にしたいのは、ご遺族の気持ちです。故人とどうしても別れ難い感情をお持ちの方もいらっしゃいます。それは経験上、会話の中で感じ取ることができます。そのような場合は、お気持ちが落ち着くまで待ってお話します。「ありがとうございます」と心からお礼を申し上げ、必要なポイントはきちんとお伝えするようにしています。

— ポイントは、先におっしゃった保存期間と火葬の件ですね。

本多 はい。期間については、病院でお亡くなりになり病理解剖をされた場合と混同される方もいらっしゃいます。病理解剖は、その日のうちに解剖が終わり、ご遺体はすぐにご遺族の元に返されますが、ご献体の場合は長期間お預かりすることになることをお伝えするようにしています。また大学によって事情は違いますが、当大学では職員が拾骨させていただくことをお伝えし、ご了承いただくようにしています。

— ご遺族に寄り添いながら、きちんと納得してご献体いただくということですね。では最後に、医師や学生に対してのメッセージをお願いします。

本多 教員ではない私が言うのは何ですが…。「しっかり勉強してください」、「ご献体には礼と尊敬の念を持ち、故人、ご遺族のお気持ちも受け止めてください」。これに尽きますね。

取材を終えて

本多さんは、40年に亘り、名市大の解剖実習を支え続けている。お話の中でお一人の献体で複数回勉強させていただくため、技術職員はご遺骨をお戻りするまでずっと気の抜けない状態であること、彼らがいそいそ解剖もCSTも滞りなく実施できていることを強く感じた。

CSTのために処置したご遺体は乾燥しやすい状態であると言う。複数回のCSTにご遺体を使わせていただくには、技術職員の努力だけでなくCSTに参加する医師の協力も必要であると考え。いずれの大学であっても解剖学教室スタッフだけでなく、参加する側のご献体を大切に思う気持ちが重要であると言えよう。

すべては個人の尊い意志を受け止め、医学の発展に活かしていくために——。



統合解剖学 植木教授と教室員

医療を育てる活動の輪に、あなたもご参加ください。

日本の医療技術の習得や開発は、私たちの、未来の日本のためのものです。外国の施設や善意にいつまでも頼るのではなく、医療の質と安全については、日本国民自らが負うべきではないでしょうか。メリジャパンの趣旨にご賛同いただける方は、寄付、またはご入会を受け付けておりますので、ぜひご協力ください。お問い合わせをお待ちしています。

◆ 会員の種別

会員の種別	特 徴	年会費
正会員	総会議決権を持つ会員です。 運営にも積極的に関わっていただきます。	個人会員 ¥5,000
		法人会員 ¥10,000
賛助会員	総会の議決権はありません。 活動を支援してくださる方が対象です。	個人会員 ¥3,000
		法人会員 ¥5,000

※正会員・賛助会員ともに入会金は不要です。

ご寄付・ひとさーじ募金について

医療事故や医療過誤をなくし、高度な医療技術の普及をめざす活動を推進するための募金を行っています。

みなさんが、そしてご家族・ご友人がより高度な医療を安心して受けられるよう、医療の質と安全性の向上をめざす活動へのご協力をお願いいたします。

ひとさーじ募金をご希望の方

ひとさーじ募金とは医師の医療技術向上のための「サージカルトレーニング」を支えていただく、定期的な募金システムです。毎月1,000円の継続の寄付により、医師・医療を育てる活動に協力をお願いします。

1,000円は、1回のサージカルトレーニングで、ひとりの医師が着用するガウン・帽子・マスク等の費用に相当します。

お申し込み口数 **1口1,000円**より

法人での寄付・遺贈寄付をご希望の方

事務局までご相談ください。

TEL 052-784-8775 E-mail meri_info@hachiya.or.jp

銀行振込での募金・ご寄付ご希望の方は、下記のいずれかの口座へお振込ください。

- 名古屋銀行 覚王山支店
普通3312469 口座名:トクヒ)メリジャパン
- 三菱UFJ銀行 覚王山支店
普通0120842 口座名:トクヒ)メリジャパン
- ゆうちょ銀行
12140 89381881 口座名:トクヒ)メリジャパン
(他行からお振込みの場合は
ゆうちょ銀行218支店 普通8938188)

※いただきました個人情報は、領収書、活動報告、市民講座のご案内などの送付に使用し、それ以外の目的には使用いたしません。
※振込手数料は、ご負担いただきますようお願いいたします。

編集 後記

今回のニュースレターでは、日頃ご献体の管理をさせていただいている、名古屋市立大学の本多さんのインタビューを掲載いたしました。

本多さんが日頃からご献体を提供してくださる方、そのご家族にも献体の流れをお伝えしながら精神面にも気を遣われ、ご献体を大切にお預かりしている様子がインタビューからよくわかりました。

昨年度当法人が実施補助させていただいたキャダバーサージカルトレーニングは愛知県内外含め8件となりました。今年度は1.5倍ほどの予定をしています。トレーニングが増えるということは、必要性が認知され広がって嬉しい反面、本多さんの様な技師の方々の負担も多くなっていることを知りました。

今まで以上にご献体への敬意を払い、できるだけトレーニング前に近い状態で技師さんにお返しできるよう、補助をしていきたいと感じています。

普段の柔らかく話しやすい本多さんのお人柄がよくわかるインタビューとなりました。(M)



MERI Japan

特定非営利活動法人メリジャパン

〒464-0821 名古屋市千種区末盛通2-4 はちや整形外科病院内

電話 052-784-8775 E-mail meri_info@hachiya.or.jp

URL <https://www.merijapan.org>